おちほ

第90号 平成30年3月25日 発行　社会福祉法人 椎の木会 **落穂寮** 発行者 太田正則
TEL 0748−77−2299 FAX 0748−77−5588 http://ochiho.noor.jp/

みんなが主役！スプリングコンサート

三月。暖かい春の季節がやってまいりました！毎年恒例となっている春の行事、〝スプリングコンサート〟が今年も行われました。

今回お招きしましたのは、シンガーソングライターの咲さんです。咲さんは岐阜県出身で、滋賀県長浜市を拠点として活動されています。

前半はアコースティックギターでの弾き語り。ジブリの名曲「カントリーロード」や中島みゆきさんの「糸」などを歌って下さいました。

後半は利用者さんリクエストの「森のくまさん」や「おもちゃのチャチャチャ」などの童謡をみんなで歌い、利用者さんも鈴やタンバリンを持ってリズムに乗ったり踊ったりしてとても楽しく大盛り上がりでした！

アンコールでもう一度弾き語りをして下さり、最後は盛況に終えることが出来ました。

利用者、職員共に大満足なコンサートでした！

あゝ、無情…四歳！

理事長　山下陽一

虐待により幼児死亡

昨年（二〇一七年）十二月、大阪箕面市で四歳児が虐待により死亡したことが報じられました。

報道によると、実母と亡くなった子の兄弟、実母の交際相手、そして実母との関係が明らかでない交際相手の仲間が集合住宅で住んでいた、というのです。子への虐待は「食べこぼしをした」という些細なことが発端で、それが激しい殴打となったものでした。このように無抵抗な幼児を虐待する事件は枚挙にいとまがないほど発生している今日、何がそうさせているのか、その虐待行動を抑制することはできないのか、常々考えていたのですが、ローレンツの著作「攻撃」（みすず書房一九七〇年）により読み解こうと思います。

虐待の根源は攻撃行動

この事件の詳細は解りませんが、居住空間が極めて狭い空間で発生したようです。しかも、母子と人間関係が詳細不明な無職の若い男が二人同居（雑居？）していた、という状況です。おそらくこの二人の男は世間の人とのコミュニケーションを持つことが極めて少なかったのでしょう。まるで二頭の雄ライオンが狭い檻の中で、鬱屈した牙を抱えながらウロウロと歩き回っている光景に似ているものだったのではないかと簡単に想像できます。

大自然の中であれば弱いものたちは逃げる場所があるでしょう。しかしこの幼児たちは狭い集合住宅で逃げ場がないまま悲惨な結果となりました。「攻撃」の観点からみると不平や不満が鬱積した二人の男たちは攻撃のほこ先を外部に向けて発散させるということをせず、自分の縄張りから邪魔者を追い払う行動として現れたということができるでしょう。

彼らは虐待は「日常的だった」といっているところからすると、「しつけ」として「あんたのためや！」と正当化されていたのかもしれません。「しつけ」という様式を取って虐待が極めてひ弱な幼児に向けられたのです。社会によくあるこれらの虐待事件は常にその意識がないまま行われているのが実態です。そして「日常的に」というこのことこそ虐待が過激化する重要な点です。それを重ねるごとに爆発させる発火点（ローレンツは臨界限度といっています。）が下がってくるのです。次第に些細な振舞いに反応して、過剰な攻撃行動に発展するようになります。この事件では「食べこぼしをしたから」という日常の些細なことでした。幼児は親でもない男たちの理不尽に小さな抵抗をしたでしょう。それがまた原因となって、長時間の暴行が続けられたのかもしれません。男の一人は「死ぬかもしれないと思った」といっていますが、この爆発的激怒は自分で抑制できるようにはなっていないようです。若い無職の男達二人分の鬱屈の牙が無抵抗な幼児に向けられたのです。「しつける」という様式をとって敵を追い払うまで執拗に繰り返され続けられました。

この時の幼児のゆがんだ涙顔を想像するにつけ、亡くなった子に何もできなかったおとなのひとりとしてこころのやりどころがありません。

母性本能は存在しない

では、実子が虐待されていることについて母親はどうだったのでしょうか。ローレンツはシチメンチョウの観察で面白い報告をしています。人為的に聴覚を取り去った雌は正常に卵を孵化させるのですが、孵化するやいなや「その子を即座に突き殺してしまった」というのです。自分の子がどのような様子なのか知らないままに、侵入物として反撃するのです。親鳥と雛のコミュニケーションは視覚より聴覚が優先し、唯一鳴き声の応答が自分の雛鳥であることを認識するらしく、親鳥の聴覚障害により育雛関係を結べなかったのです。ローレンツは、わたしたちに考えさせる、といって次の様に主張しています。

「ひっくるめて、「母性本能」とか「育児衝動」とか呼ばれうるようなものが、実際には存在しないことはあきらかである。」と。

「らくだの涙」

二〇〇四年、モンゴル・ゴビ砂漠の遊牧民の生活がドイツの制作者によりドキュメンタリー映画として制作されました。このことは以前この紙面で述べたのですが、母らくだが涙を流した、というはなしです。

一頭の若い雌らくだが白いらくだを産みました。しかし、母らくだは難産ショックのためか育児を拒否し、子らくだがすり寄ってきても追い払い授乳させないのです。そのときの子らくだの口元のアップ映像は涙をもよおすほどにかわいそうでした。そのまま育児拒否されると子らくだは死んでしまいます。そこで遊牧の一家は町の馬頭琴の演奏家を呼び、青いリボンをたなびかせた馬頭琴の哀調を帯びたメロディーに一家のお母さんが歌うのです。その時にらくだが涙を流したのです。一種の音楽療法といえるものでしょう。母らくだの育児拒否は少しずつ改善され、授乳できるようになったというものです。

親と子の間は本来自然であるべきなのに種々の人為が介在して親子を強く結びつける力が緩んできているのではないかと思います。幼い時から子どもに向き合い確定した関係が構築され難くなっている今日こんな悲劇が繰り返されるのは正視するに忍びないのですが、出口はどこなのか避けることも退くこともできない現実を前にしてただろいでいます。

（二〇一八・二・二二）

自立支援

寮長　太田正則

今年も何とか新しい年を迎えることができました。本年もどうぞよろしくお願い致します。

さて、今年の冬は予想以上の厳しい寒さで、雪こそ大雪とまではいかないまでも、連日の真冬日の影響で久しぶりに水道管が凍結して破裂し、二階建て短期療育棟の二階部分の床が水浸しになってしまいました。毎年起きる自然現象であれば想定の範囲で準備はできるのですが、しばらく起きていない現象に常時気を配っておくことはやはり難しいものです。このことは自然についてだけ言えることではなく、特に私たちが関わっている人たちは、常時の環境調整があって安定した暮らしを提供することが可能になるため、ともするとその配慮がなくても大丈夫という錯覚に陥らないように心がけておかなければなりません。環境に配慮を欠いたことによって起きた出来事の原因を利用者さんに求めず、自責の念をもって対処することが求められます。

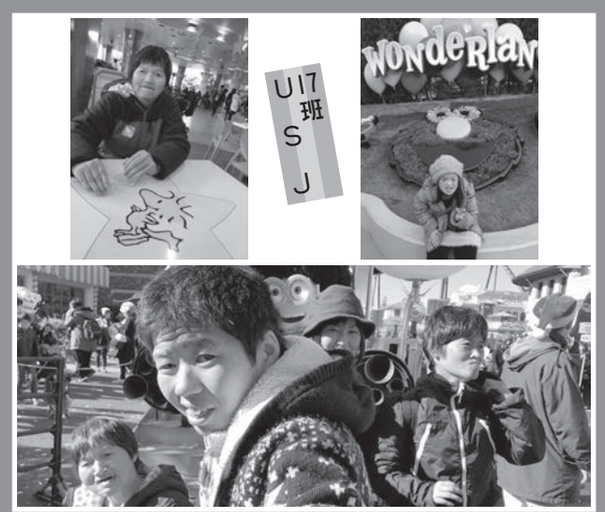
「自立支援」

障害者総合支援法の前は障害者自立支援法という名前でした。障害を持つすべての人の自立に向けた取り組みを支援するというものですが、平成三〇年の報酬改定では、介護報酬においてもこの「自立支援」が取り上げられ、アウトカム（成果・結果）評価を導入し、「自立支援・重度化防止に資する質の高い介護サービスを実現」した事業所に「要支援状態維持・改善率加算」をつけインセンティブが働くようにするものです。これは一人でも多くの高齢者が元気に過ごせることで健康寿命を延ばし、充実した生活を営むことと、それによる社会保障費の抑制が可能とされています。行政側では、埼玉県和光市において、関係機関（地括センター・ケアマネ・サービス事業所）や専門職（OT・PT・歯科衛生士・管理栄養士・管理薬剤師）が連携し必要な方に適切な支援を提供することで心身機能の維持・改善が図られ、介護費用を抑えることができており、全国の自治体が注目しています。事業所側では、質の高い心身機能訓練等を提供することで、ある一定の成果が見られることが評価され、報酬アップにつながるとすればやる気も上がるというものでしょう。しかし、そこに利用者の意思は尊重されるのでしょうか。ご本人が「しんどい」と感じているにもかかわらず、周囲が「まだ頑張れる」と励ます。人は老化していくものです。頑張っていつまでも維持できるものではありません。不死身ではないのですから。また、痛みなどを伴うリハビリを繰り返すことで機能回復が図られたとして、その取り組みはどのぐらいの期間を見込めばよいのでしょうか。出口の見えない訓練によって、その方の穏やかな暮らしの時間は脅かされないのでしょうか。同じことが障がい者支援の現場でもみられます。重度の障害を持ち、子供の頃から入退院を繰り返されておられたKさんは大人達から「自立するため」「あなたの幸せのため」とリハビリを勧められ、曲がらない足を曲げ、曲がらない手を曲げるために痛い思いをし、なかでも人工呼吸器を外す訓練が一番辛かったと言われています。そして、「障がいはなくさなければならず、健常者に近づくことが自立であるという、健常者中心の押し付けだった」と言われています。（H三〇・二・三朝日新聞耕論）

落穂寮が児童入所施設だった当時はまさに自立に向けた訓練でしたが、その中で成人を迎えた利用者に対しても日々訓練の毎日でした。この施設にいる限り三十歳を過ぎ、四十歳になっても自立に向けた訓練を求められる彼らの人生を振り返った時、彼らの幸せな生活とは何かを考えさせられました。自分で出来ることが増えることは素晴らしいことではありますが、そのために費やされる時間はその人が納得のいくものでなくてはなりません。Kさんは、「私たち障害者が目指してきた自立とは、無理をしてなんでも自分でやることではありません。介助者の方々に上手に助けを借りながら、自分で決め、決めたことに責任を持つこと。」と言われています。ただ、高齢者も、Kさんもこうして自分の意思をはっきりと伝えることができます。支援を提供する側がよほど強引な事業者でない限り尊厳は尊重されるでしょう。しかし、私たちが支援する重度の知的障がいを持つ方々は、自分の意思を伝えることが苦手であり、弱い方々です。いつまで頑張らせるのか、どこまで頑張らせるのか、そもそも頑張らないと生きてはダメなのか。「ありのままで」いることを認めあうことで、共に生きる社会という生活環境にみんなが心を配ることができればと思います。

（二〇一八・二・一〇）

REFRESH TRAVEL 2017



REFRESH TRAVEL 2017

5班
鈴鹿サーキット

6班
松田聖子コンサート

11班
モクモクファーム

14班
京都タワー

16班
パルケエスパーニャ

18班
USJ 電車で GO

19班
温泉

21班
近江牛

男子棟 親子旅行

今年も親子旅行に行ってきました。大型観光バスに乗って甲南の宮乃温泉へ出発です。30分ほどのドライブを楽しみ現地に到着。大広間に案内され入ると、たくさんのお料理が並べられていました。いただきますが待てないくらいにテンションが上がる利用者さん。職員の声掛けに合わせてさぁ「いただきます」です。

少しフライングしながら勢い良く召し上がる人たち、ゆっくり味わう人たち、保護者の方との時間を満喫する人たち、皆さんそれぞれ楽しい時間を過ごされました。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、帰りの時間に。保護者の方との別れを惜しみつつ、バスに揺られて無事におちほに帰ってきました。

たくさん食べて皆さん満足の1日だったと思います。

来年はどこに行くのでしょうか?お楽しみに!

女子棟 親子旅行 雄山荘

今年の女子棟親子旅行は、大津「里湯昔話　雄山荘」へ。

あいにくの曇り空ですが、みなさんそんな事は関係なく、朝から嬉しくて落ち着かない様子でご家族の到着を待っておられました。

出発時間が近づき、ご家族の方も到着され、みなさんもお出かけ準備が整うとテンションアップ!

ワイワイとバスに乗り込むと、みなさんの表情はキラキラしていました。さぁ!出発GO!バスの中ではお喋りに花が咲いたり、窓から景色を眺めたりとそれぞれにドライブを楽しみながら和気藹々と雄山荘までの道のりを進みます。

雄山荘は、琵琶湖を見下ろす高台に建つ温泉旅館です。細い道を抜けた先に琵琶湖の景色と雄山荘が見えてきました。いよいよ到着です。ロビーに入ると、先に現地に到着されていたご家族の方が迎えて下さっていました。宴会場には、すでに豪華な懐石料理が用意されており、それぞれ思い思いの席に着くと「いただきます」が待ち遠しい様子でソワソワ。それでは「いただきま~す」♡

落穂の食事も美味しいですが、普段とは違うお刺身や近江牛など目の前に並んだお料理の数々に舌鼓を打ちながら、久しぶりに会えたご家族の方と一緒の食事は又格別なものがありますよね。

お腹いっぱい食べた後は、ロビーでくつろいだり、外へお散歩に出たりとひとときのフリータイムを楽しまれていました。

今年もご参加戴きましたご家族様、ありがとうございました。

12月に入ると世間は年越しの準備で忙しくなる一方、落穂の利用者さんにとっては帰省が待ち遠しくなられる季節でもあります。そんな年末ならではの楽しみを心待ちにされている中、皆さんがもう一つ楽しみにされている落穂のイベント、クリスマス会が今年も開催されました。

今年のクリスマス会には、県立甲西高等学校の吹奏楽部の生徒さん達が、クリスマスにふさわしい素敵な曲を演奏するために駆けつけてくださいました。この時期お馴染みのどこかで聴いたことのあるような曲を利用者さんも一緒に口ずさんだり、また落穂で施設実習中の3名の実習生や有志の職員とその家族が、楽器を使って利用者さん全員を巻き込んでの演奏を繰り広げ、それはそれは楽しいコンサートの時間でした。

コンサートの他にも豪華なクリスマスランチをいただき、大好きなケーキを食べた後にはサンタさんから一人ひとりにクリスマスプレゼントが贈られました。今年はいったい何をもらったのでしょうか。よっぽど嬉しかったようで、皆さん大はしゃぎで次々とプレゼントを開けられては笑顔が溢れかえっていました。メリークリスマス！

節分

二月三日、落穂寮にも節分の季節がやってまいりました。

突如食堂に鬼が現れました！年男、年女の利用者さんが袴を着て中心となって鬼を目掛けて「鬼は外！福は内！」掛け声に合わせてみんな一斉に豆を投げます。中には本気で投げる利用者さんも、、。鬼もあまりの勢いに逃げるように去っていきました。

おやつに豆を食べてみんなで無病息災を願いました。今年一年も利用者、職員共に健康に過ごせるようにしたいと思います！

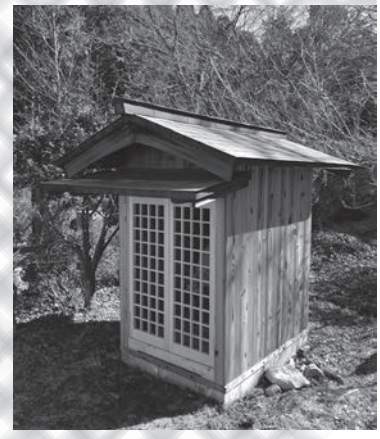
〜年男！年女！〜

ビフォーアフター

祀編

築45年以上の建物が、今はギャラリーに変身した作業棟を最後にすべて建て直されたと思っていたのですが、大事なお地蔵様の祠までもが、とうとう経年劣化とシロアリによりボロボロになってしまいました。数年前の事務所建て替え時にお地蔵様のお引越しをした際にも、もう暫くは持つだろう…と思っていたのですが、山手に移し替えたりしたことや今年の長雨の影響もあってか石部の土地に移ってから長きに渡って旧事務所前やグラウンドの片隅から落穂寮のみなさんを見守ってくださっているお地蔵様の住家までも朽ちてしまったのです。

そこで祠も大規模改修と言わんばかりに、新しいものへと作り替えられました。お地蔵様も新しくなった祠の中で嬉しそうにされている様でした。



世代交代～去る物あれば来る物ある～

少し前に送迎で使用していた車がエブリーからエブリーに変わった内容を挙げていましたが、今度は通院や外出に毎日利用者さんの足になって動き回っていた車が、約14万キロになる手前で乗り換えられることになりました。それが、ワゴンRからワゴンRへ…

強いこだわりにより同一車種への買い替えを選んでいる訳ではないのですが、落穂寮ではこのような出会い運があるみたいです。

何気ないと思われる変化に気づきストレスを感じてしまわれる利用者さん達にとったら、このような大きく変わらない為の出会い運はありがたい限りです。

利用者さんの外出等における楽しい思い出の片隅に車の事も覚えておきたいと思います。初代ワゴンRのこれまでの健闘に感謝します。

頑張って走ってくれました

初代ワゴンR

泉

今年は例年にない寒い年になりました。湖南市近辺では大雪になりませんでしたが、寒波でプールが凍ると、氷に人が乗れる厚さになるほどでした。

また、インフルエンザも大流行しましたが、この原稿を書いている2月後半の時点で利用者さんへの感染もなく、ひと安心しているところです。今年の異様な寒さは地球温暖化による気候変動ではないかとも言われていますが、もう一つ気になる話もあります。

現在、太陽の活動が低下傾向であり、もしかするとこのまま「小氷河期」が来るかもしれないという説です。

直近の「小氷河期」は三百年ほど前で、この期間には世界中で飢饉が続発し、ヨーロッパでは百五十万人が命を落としたそうです。この先、今冬の野菜の高騰や平成5年に起きた米不足の騒動が同時に何年も続くような事態もあるかもしれません。温暖化にしろ、寒冷化にしろ、今までと同じ生活が続けられない可能性はあります。

「衣食足りて礼節を知る」という中国の言葉があります。物質的な豊かさがあってこそ、心の豊かさも保証される、という現実的な考えです。一方、日本には「ボロは着てても心は錦」ということわざがあります。この言葉のどちらが正しいのか、試されるような事態が来てほしくはないものです。しかし、厳しい状況で最初に犠牲になるのはいつの時代も社会的弱者です。そのような立場の人たちをどこまで守っていけるのか、心の豊かさが問われる時代が近いのかもしれません。

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申し上げます。今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

ご協力ありがとうございます

平成30年2月末現在

〈物品の寄付〉

山本里子
アイディeメタル
坂本フミ江
宇川新蔵

（敬称略）

ありがとうございました。

木言（こと）

百年生きた木も
切られるのは一瞬
その木で作られたテーブルが
何年道具として生きるのか
使う人次第なのです